

■ 概況

2/20~2/26のNYMEX・WTIは、48.73~53.78ドルの範囲で推移した。

2月27日は、新型肺炎の感染拡大を背景に世界経済の後退懸念から、5営業日続落した。ゴールドマンサックスは、2020年の米主要企業の成長利益率をゼロと予想した。米国株価も暴落、金融市場は弱気一色となった。4月限終値は前日比1.64ドル安の47.09ドル。

週末28日は、世界経済の減速に伴う石油需要の減退懸念の拡大を背景に、売りが加速、7営業日続落、45ドルを割った。3月5日・6日のOPECプラスの合同会合で、サウジが100万b/dの追加減産を提案する予定との報道もあったが、積極的な買いにはつながらなかった。ペーカーヒューズ社発表の米国稼働石油掘削機は678基と前週比1基減だった。4月限終値は前日比2.33ドル安の44.76ドル。

週明け2日は、米連邦準備制度理事会（FRB）等主要国中央銀行が利下げなど金融緩和を検討中であることを好感して、8営業日ぶりに反発した。また、今週末のOPECプラス合同会合で、従来追加減産に慎重だったロシアも同意するとの見方が広がったことも値上がり要因となった。4月限終値は前週末比1.99ドル高の46.75ドル。

3日は、米FRBが緊急利下げを発表したことから、経済回復の期待感、為替市場でのドル安・ユーロ高で、買われ続伸した。OPECプラスの追加減産観測も値上がり要因となった。4月限終値は前日比0.43ドル高の47.18ドル。

4日は、新型肺炎による経済停滞に対応して、翌日のOPEC臨時総会と6日のOPECプラスの閣僚会議で、追加減産が検討されるものの、ロシアが反対している模様であり、3

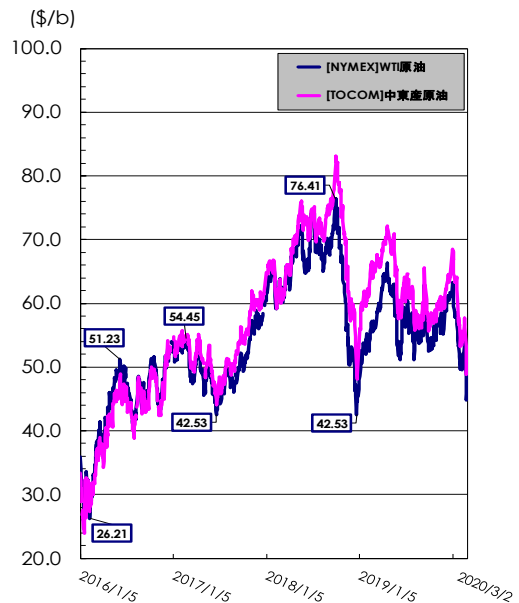
日ぶりに反落した。米国エネルギー情報局（EIA）の在庫週報で、原油在庫の増加が市場予想を大きく下回ったことなどが、下値を支えた。4月限の終値は前日比0.40ドル安の46.78ドル。

アジアの指標原油である中東産バイ原油/東京市場（4月渡し）は2月20日~26日の間52.70~57.50ドルの範囲で推移した。2月27日50.60ドル、28日48.50ドル、3月2日50.30ドル、3日51.60ドル、4日51.60ドルと推移した。

為替は2月20日~26日の間110.31~112.11円の範囲で推移した。2月27日110.32円、28日109.43円、3月2日107.66円、3日108.24円、4日107.36円で推移した。

そのような中で、3月2日時点の小売価格は、ガソリンが前週比0.2円の値下がり、軽油も同0.2円の値下がり、灯油は同3円の値下がり（18%ベース）だった。ガソリンは6週連続の値下がり、軽油は5週連続の値下がり、灯油も5週連続の値下がりだった。この週（3月第1週）の原油コストは大きく値下がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに全社4.0円値下げとなった。

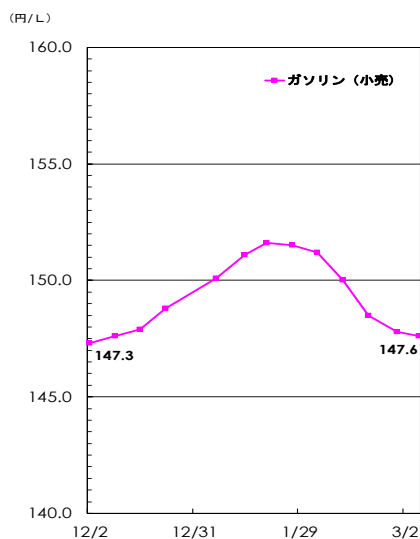
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	2/23 ~ 2/29	3,219 ▼ -83	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	82.2 ▼ -2.1	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	2/29	10,755 ▼ -10	▼ -
価格	中東産原油 (TOCOM) (\$/bbl)	3/2	50.85 ▼ -3.97	▼ -14.0
	WTI原油 (NYMEX) (\$/bbl)	3/2	46.75 ▼ -4.68	▼ -9.8
	原油CIF単価 (\$/bbl)	2月上旬	71.71 ▲ 0.89	▲ 9.45
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	49,482 ▲ 753	▲ 6,548
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	109.70 ▼ -0.31	▼ -0.06
	外国為替TTSレート (¥/\$)	3/2	108.66 ▲ 3.25	▲ 4.37



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/23 ~ 2/29	939 ▲ 56	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	833 ▼ -19	▼ -	
	輸出	"	79 ▲ 60	▼ -	
	在庫	2/29	1,723 ▲ 28	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/25 ~ 3/2	55.4 ▲ 0.5	▼ -4.0	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/25 ~ 3/2	49.9 ▼ -3.8	▼ -5.1
		(TOCOM/中部)	3/2	49.5 ▼ -5.5	▼ -9.5
	小売 [週動向] (資工庁公表)	3/2	147.6 ▼ -0.2	▲ 2.7	

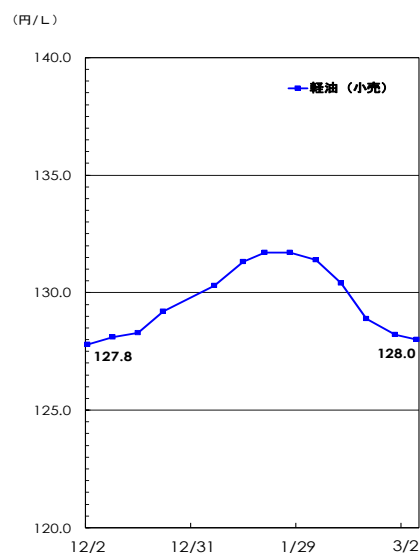
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

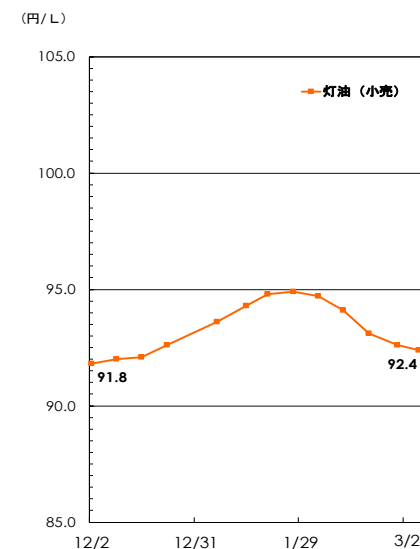
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/23 ~ 2/29	766 ▲ 22	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	582 ▼ -138	▼ -	
	輸出	"	303 ▲ 125	▲ -	
	在庫	2/29	1,341 ▼ -119	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/25 ~ 3/2	59.0 ▲ 0.7	▼ -4.5	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/25 ~ 3/2	59.6 ▼ -3.3	▼ -4.4
		(TOCOM/中部)	3/2	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	3/2	128.0 ▼ -0.2	▲ 2.2	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/23 ~ 2/29	348 ▲ 84	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	386 ▼ -78	▲ -	
	輸出	"	0 ➡ 0	➡ -	
	在庫	2/29	1,562 ▼ -37	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/25 ~ 3/2	58.1 ▲ 0.2	▼ -4.5	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/25 ~ 3/2	52.0 ▼ -4.3	▼ -9.6
		(TOCOM/中部)	3/2	53.0 ▼ -5.0	▼ -6.0
	小売 [週動向] (資工庁公表)	3/2	92.4 ▼ -0.2	▲ 3.0	



■ 関連情報

1 海外/原油

3月4日のNYMEX市場WTI原油は、朝方買いが先行したものの、引き続き、新型肺炎による世界経済の停滞が懸念される中、翌日のOPEC臨時総会と6日のOPECプラスの閣僚会議で、100万b/dの追加減産が検討される模様であるが、ロシアが反対しているとの報道もあり、3日ぶりに反落した。ただ、米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報の発表で、原油在庫が前週比80万バレル増と市場予想(310万バレル)を大きく下回り、ガソリン・中間留分も市場予想を上回る減少を示したこと、また、前日のFRBの緊急利下げを好感したことが、下値を支えたと見られる。4月限の終値は前日

比0.40ドル安の46.78ドル、5月の終値は同0.38ドル安の46.95ドル。

EIAによると、3月2日時点のガソリンの小売価格は、前週比4.3セント値下がりの1ガロン2.423ドル(69.5円/㍉)、ディーゼルは同3.1セント値下がりの2.851ドル(81.7円/㍉)となった。ガソリンは3週ぶりの値下がり、ディーゼルは8週連続の値下がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2020年2月23日～2月29日に休止したトッパー能力は37.0万バレル/日で、前週に対して1.3万バレル/日増加した(全処理能力は351.9万バレル/日)。原油処理量は321.9万klと、前週に比べ8.3万kl減少。前年に対しては37.7万klの減少。トッパー稼働率は82.2%と前週に対して2.1ポイントの減少、前年に対しては9.6ポイントの減少となった。

生産は前週に比べてジェット、C重油が減産となり、その他の油種で増産となった。ガソリン/6.4%増、ジェット/6.7%減、灯油/31.8%増、軽油/2.9%増、A重油/15.4%増、C重油/2.1%減。今週のC重油の輸入は0.4万kl(前週比0.4万kl増)。軽油の輸出は30.3万kl(前週比12.5万kl増)。

出荷(輸入分を除く)は前週比でC重油が増加となり、その他の油種で減少となった。前年比では灯油が増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は83.3万kl(対前週2.3%減)と3週連続で減少となり、28週連続で100万klを下回った。ジェット1.0万kl(対前週76.5%減)、灯油38.6万kl(対前週17.0%減)、軽油58.2万kl(対前週19.2%減)、A重油20.9万kl(対前週20.7%減)、C重油10.6万kl(対

前週8.2%増)。

(単位:千kl)

	今週 (2/23 ~ 2/29)	前週 (2/16 ~ 2/22)	前週比
ガソリン	833	852	▼ -19 (-2%)
ジェット燃料	10	41	▼ -31 (-76%)
灯油	386	464	▼ -78 (-17%)
軽油	582	720	▼ -138 (-19%)
A重油	209	264	▼ -55 (-21%)
C重油	106	98	▲ 8 (8%)
合計	2,126	2,439	▼ -313 (-13%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

2月29日時点の在庫は、ガソリン、A重油が積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。前年に対してはガソリン、ジェットが増加となり、その他の油種で減少となった。

ガソリンは172.3万kl、前週差2.8万kl増。前年に対しては13.4万kl多い。

灯油は156.2万kl、前週差3.7万kl減。前年に対しては3.4万kl少ない。

軽油は134.1万kl、前週差11.9万kl減。前年に対しては16.8万kl少ない。

A重油は70.8万kl、前週差2.0万kl増。前年に対しては8.2万kl少ない。

C重油は180.5万kl、前週差6.2万kl減。前年に対しては15.5万kl少ない。

(単位:千kl)

	今週 (2/29)	前週 (2/22)	前週比
ガソリン	1,723	1,695	▲ 28 (2%)
ジェット燃料	790	843	▼ -53 (-6%)
灯油	1,562	1,599	▼ -37 (-2%)
軽油	1,341	1,460	▼ -119 (-8%)
A重油	708	688	▲ 20 (3%)
C重油	1,805	1,867	▼ -62 (-3%)
合計	7,929	8,152	▼ -223 (-2.7%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

2月25日～3月2日の原油価格は、前週比で大きく値下がりし、為替も円高で、原油コストは大きく値下がりしたものと見られる。

陸上スポット価格は、2月25日～3月2日の間、ガソリン107～110円台で値上がり後大きく値下がり、軽油58～59円台で値上がり後大きく値下がり、灯油56～59円台で値上がり後大きく値下がりして推移した。

海上スポット価格は、同期間で、ガソリン108～112円台で値上がり後激しく値下がり、軽油60～61円台で値上がり

後値下がり、灯油52～57円台で大きく値下がりして推移した。

先物価格は、同期間で、ガソリン101～106円台で激しく値下がり、軽油58～61円台で激しく値下がり、灯油49～54円台で激しく値下がりして推移した。

次週の元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、全社4.0円の値下げとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

2月25日～3月2日の製品スポット市況は、2月18日～24日平均と比べ、陸上の3品と海上の軽油を除いて、各油種・各取引で値下がりした。

直近の陸上スポット価格(2/25～3/2、千葉・川崎・中京・阪神の4地区の陸上ラック価格平均値)は、前週比で、ガソリンは0.5円の値上がり、灯油は0.2円の値上がり、軽油は0.7円の値上がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、前週比で、ガソリンは0.1円の値下がり、灯油は2.1円の値下がり、軽油は0.5円の値上がりだった。

先物価格は、前週比で、ガソリンが3.8円の値下がり、灯油は4.3円の値下がり、軽油は3.3円の値下がりだった。

3月第2週の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社4.0円の値下げになった。

(RIM) (単位: 円/ℓ)

[陸上ローリー4地区平均]	今週 (2/25～3/2)	前週 (2/18～2/24)	前週比
レギュラー	55.4	54.9	▲ 0.5
灯油	58.1	57.9	▲ 0.2
軽油	59.0	58.3	▲ 0.7

(TOCOM) (単位: 円/ℓ)

[期近物/終値] [平均]	今週 (2/25～3/2)	前週 (2/18～2/24)	前週比
レギュラー	49.9	53.7	▼ -3.8
灯油	52.0	56.3	▼ -4.3
軽油	59.6	62.9	▼ -3.3

※上記価格は税抜き価格

参考値 (2/25～3/2実績値) (単位: 円/ℓ)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▲ 0.5	▼ -3.8	▼ -1.6
灯油	▲ 0.2	▼ -4.3	▼ -2.0
軽油	▲ 0.7	▼ -3.3	▼ -1.3
A重油	▲ 0.7		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

3月2日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前回比0.2円安の147.6円、軽油も同0.2円安の128.0円、灯油は18ℓベースで同3円安の1,663円(1ℓベースでは同0.2円安の92.4円)。ガソリンは6週連続の値下がり、軽油は5週連続の値下がり、灯油も5週連続の値下がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは8道県、横ばいが6県、値下がり33都府県となった。全国最安値は埼玉県の141.7円(同0.2円安)、その次に安いのは石川県の142.3円(同横ばい)、最高値は長崎県の160.5円(同0.4円安)。横ばいは大分県等6県、最も値上がりしたのは0.7円高

の三重県(同147.3円高)、最も値下がりしたのは同2.1円安の徳島県(145.5円)だった。

先週の原油コストは値上がりし、今週適用の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社1.5円の値上げとなった。今週は、原油価格は大きく値下がりし、為替レートも円高で、原油コストは大きく値下がりした。次週適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社4.0円の値下げとなった。次回調査時(3月9日)のガソリン・灯油の小売価格は、値下がりが見込まれる。

(資工庁公表) (単位: 円/ℓ)

[週動向]	今週 (3/2)	前週 (2/25)	前週比	直近高値
レギュラー	147.6	147.8	▼ -0.2	08/8/4 185.1
灯油	92.4	92.6	▼ -0.2	08/8/11 132.1
軽油	128.0	128.2	▼ -0.2	08/8/4 167.4

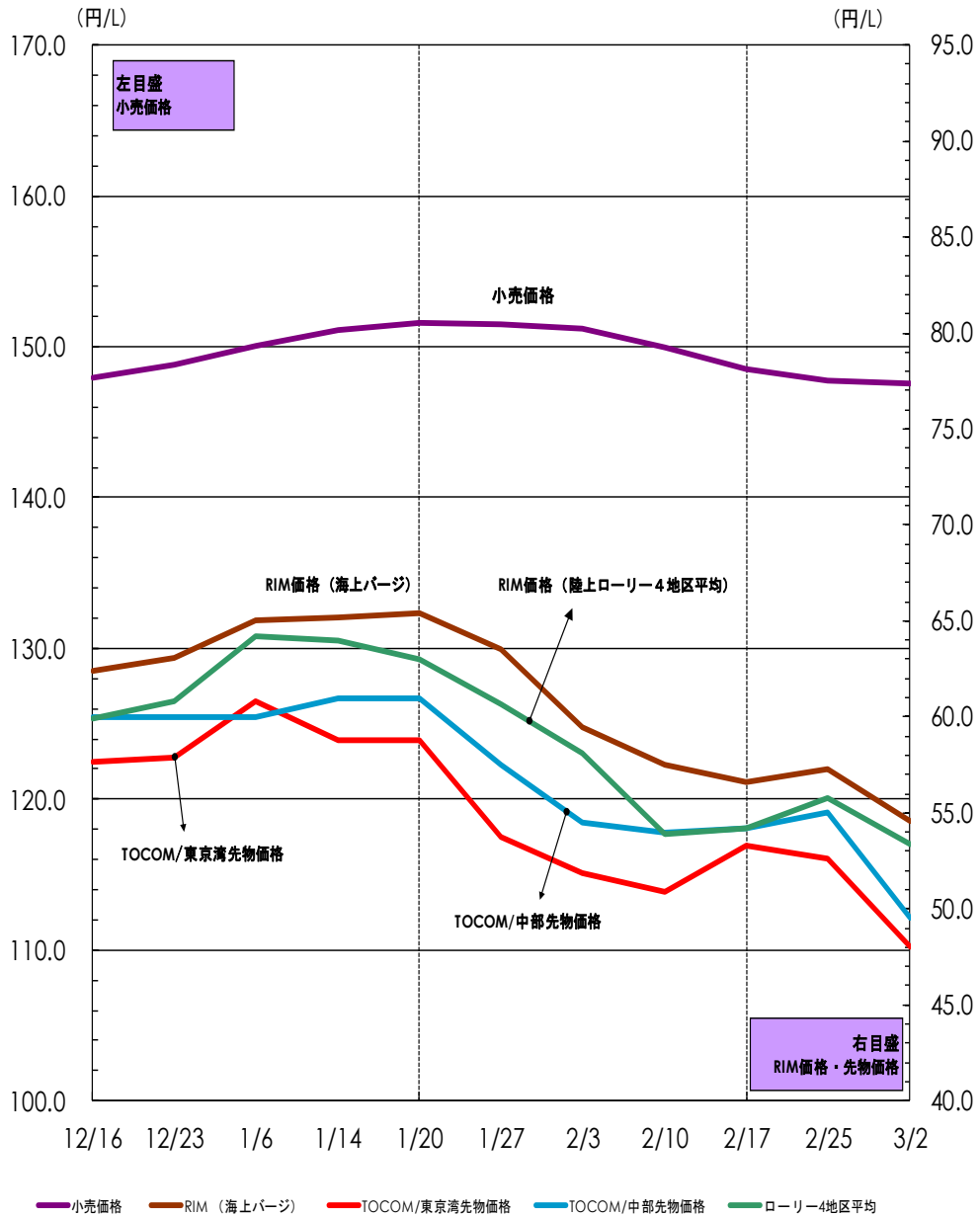
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2019/12/16 ~ 2020/3/2)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回 (2019第47号) の公表は、3/13 (金) 14:00 です。

「セルフSS出店状況」(令和元年9月末現在) は、12月25日 (水) 14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。
当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。
また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。
当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。
「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM (Telegraphic Transfer Middle rate : 中値) を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値) を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾 及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。